韓国の都市

狩野　修二

本稿では、韓国の都市に関する資料を紹介したい。

韓国の都市といって、最初に思い浮かぶのは首都ソウルであろう。ソウルは国土の約〇・六％を占めるにすぎないが、全人口の約二〇％、約九九九万人が居住する大都市である。**砂本文彦著『図説ソウルの歴史―漢城・京城・ソウル都市と建築の六〇〇年』（河出書房新社　二〇〇九年）**によれば、ソウルはかつて時代により漢山州、揚州、広州、南京、京都、漢陽、漢城府、京城府などさまざまな名称があったが、一九四六年のソウル市憲章により現在のソウル市となった。この資料では、朝鮮王朝時代に風水の考えにもとづき、どのように都市を造営したのかに始まり、歴史の流れのなかで、どのように鉄道や建築物が作られていったのか、また人々の暮らしがどのようであったかなどを豊富な写真、地図などによって説明している。

近年最もソウルの街並みを変えたのは、清渓川復元プロジェクトであろう。清渓川はかつてソウル市中心部を東西に流れていた川である。交通路の確保や環境汚染対策のため、一九三〇年代から断続的にコンクリートで川を覆い、一九七〇年代には、塞いだ川の上に高架道路を建設した。これら建設物を取り除き、川を復元したのが清渓川復元プロジェクトである。**朴賛弼著『ソウル清渓川（チョンゲチョン）再生―歴史と環境都市への挑戦』（鹿島出版会　二〇一一年）**では、清渓川にまつわる歴史と人々の暮らしに始まり、川を覆う覆蓋工事の進展、またそこから復元工事に至るまでの情況や計画、そして復元後の川の街並みの変化などを詳細に記している。

川の復元工事は、都市環境の改善、地域の活性化、高架道路の老朽化対策など複数の理由と目的を持って計画されたが、復元工事や復元後の交通量の変化等による商売への影響を懸念し、周辺で商業を営む人々がこれに反対した。**五石敬路編『東アジアの大都市における環境政策』（国際書院　二〇〇九年）**では、ソウル市がどのように彼らと協議し、納得のいく対応を行ったか、その成功要因について考察している。

韓国の都市計画制度については、**周藤利一著『韓国の都市計画制度の歴史的展開に関する研究』（大成出版社　二〇一四年）**で、主に近代以降の韓国における都市計画、都市政策、土地および土地利用について日本と比較しながら分析している。特に、二〇〇〇年頃以降における都市計画・住宅法制度の抜本的な改正や一九九〇年代の土地利用規制緩和による問題点、グリーンベルト政策と呼ばれる開発区域制限等について詳細に述べている。

韓国の地方自治は一九五二年に施行されたが、その後一九六一年に朴正熙政権が軍事クーデターにより成立すると停止され、三〇年後の一九九一年になってようやく復活した。**趙昌鉉著『現代韓国の地方自治』（法政大学出版局　二〇〇七年）**では、地方自治の意義に始まり、その必要性や根拠となる法律、またその機能や権力、組織、財政など地方自治に関する問題を全面的に説明した資料である。

日本では、書籍やテレビのバラエティ番組などで県民性について取り上げられることがよくあるが、韓国ではどうであろうか。韓国で日本の県にあたる行政区画は「道」になるが、これと同等の行政区画に、特別市、特別自治市、広域市、特別自治道があり、道レベルの自治体は現在一七ある。**鄭銀淑著『韓国「県民性」の旅―全羅道、慶尚道、忠清道、江原道、済州道歩いて感じる韓国人の心』（東洋経済新報社　二〇〇九年）**によれば、韓国では日本の「県民性」に当たる言葉は「地域性」「地方色」などといわれている。日本と同様、ソウルの人の気質はこうで、東部の慶尚道の人の気質はこうであるといったイメージは確かにあるそうだ。しかし日本と違い、地域性が楽しい話題になりにくかったという。その理由は韓国の東南部にある慶尚道と西南部にある全羅道との対立が非常に深刻であったからである。このため、地域性をタブー視する雰囲気が広がってしまった。それにも関わらず著者が韓国の「県民性」について本を書こうとした理由は、紀行文を数多く執筆してきて、各地の地域性を実感することが多かったこと、また首都圏志向の強い韓国で地方に目をむけたかったこと、さらに日本人の韓国人に対する認識に多様性をもってほしかったことなどを挙げている。著者は本書中、八つの道で二五の都市を訪れ、そこで出会った人々から受けた印象（「県民性」）とそれを裏付ける歴史、自然、文化、社会事情に触れている。各地域について人口、名物、経済状況等の基本データも記載されており、客観的なイメージもつかみやすくなっている。またコラムとして、本文では紹介されなかったソウルや朝鮮民主主義人民共和国の都市についても触れられており興味深い。

（かのう　しゅうじ／アジア経済研究所図書館）